

# 「源氏物語」における寝殿造住宅の空間的性質に関する研究

著者	安原 盛彦
号	2700
発行年	2000
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/7973">http://hdl.handle.net/10097/7973</a>

氏 名 安原盛彦  
 授 与 学 位 博士（工学）  
 学位授与年月日 平成13年3月26日  
 学位授与の根拠法規 学位規則第4条第1項  
 研究科、専攻の名称 東北大学大学院工学研究科（博士課程）都市・建築学専攻  
 学 位 論 文 題 目 『源氏物語』における寝殿造住宅の空間的性質に関する研究  
 指 導 教 官 東北大学教授 飯淵 康一  
 論 文 審 査 委 員 主査 東北大学教授 飯淵 康一 東北大学教授 近江 隆  
 東北大学教授 菅野 實 東北大学助教授 永井康雄

## 論 文 内 容 要 旨

### 序論

我国古代、平安時代の住宅様式である「寝殿造」に関する本格的研究はすでに戦前に開始されている（前田松韻氏、太田静六氏）。これらは主として「寝殿造」の平面形式、及びその規模を明らかにする研究であった。これは社寺建築を含む建築史の研究が明治期以来、まず、実態を明らかにすることから出発したのに符合する。この様な研究が一段落した後、「寝殿造」の用法あるいはその空間的性質に関する研究が開始され大きな成果を上げてきている（太田博太郎氏、稲垣栄三氏、飯淵康一氏、川本重雄氏など）。これらの研究は、主として当時の貴族が遺した膨大な量の記録をもとにしている。これらには当時行われた宮廷あるいは貴族住宅に於ける儀式に関する内容が数多く収められており、従って、上述した「寝殿造」の用法あるいは空間的性質に関する研究は儀式時の用法を通してのものだったのである。

然しながら、「寝殿造」の空間的性質を総合的に捉えようとするならば、儀式時以外の、即ち、日常生活の側面からの検討が不可欠となる。ここに当時の文学作品を研究資料として取り上げる意義がある。建築史的観点から文学作品を対象とした研究は見られるものの、「寝殿造」の空間的用法あるいは性質を明らかにしようとした研究はあまり行われていない。

本研究では、古代・平安時代の代表的文学作品である『源氏物語』を対象とする。『源氏物語』は54帖に及ぶ長編であり、当時の上流貴族階級の日常生活を探るには格好の史料となっている。そこには著者の見方、考え方が書かれており、それを通して紫式部が「寝殿造」の空間的性質をどう認識していたかを明らかにする。

本研究の第1章から第3章においては、『源氏物語』を通して寝殿造住宅の空間的性質がどのようなものであったのかを様々な観点から検討し明らかにした。第4章では、実在する古代建築を基に新たな空間概念を提案し、これを基に寝殿造住宅の空間的性質を検討した。第5章では、以上の検討を基に『源氏物語』に於ける寝殿造住宅の中心領域について検討した。

### 第1章 寝殿造住宅の空間概念 ―奥と端

寝殿造住宅の空間的性質を解明しようとする時に重要な概念として「奥」と「端」がある。儀式時には、これらは奥座に対して端座というような対概念として用いられていたが、日常生活ではどのような空間概念として理解されていたのかを検討した。

『源氏物語』には建築空間と関わって「奥」、「端」という語が多く用いられる。この「奥」と「端」は儀式時と異なり対として用いられることが極めて少ない。

「奥」は方向性を示す概念であったと考えられる。その場面の主体から見て、対象方向の側、あるいはその向こう側という意味で使われている。即ち、寝殿造住宅の基本的空間要素である母屋、庇、簀子というような特定の場所を指す語ではない。「奥」は非常に曖昧な概念であり、他の語と対比的に使われたり、この語の前後に他の言葉が加えられることによって意味を帯びてくる概念である。

こうした「奥」に対し、「端」は場所を限定して示す領域概念として使われている。即ち「端」は主体が何処にあるかに関わらず、常に外部空間に近い場を示す概念であった。「端」は方向性を示す概念として用いられることもあるが、場所や意味の限定性が「奥」の場合よりはるかに強い。「端」は室内空間の底を指

す場合が多いが、外部空間である簀子も「端」と呼ばれる場合があることは、この簀子が建築の内部空間と深く関わった空間として認識されていたことを示している。

また「端」は外部空間に近いことから光の入ってくる場所として認識されている。

## 第2章 寝殿造住宅の段階的空間構成

従来は、概念的理解に留まっていた寝殿造住宅の空間的秩序について、平面上での空間的仕切りの仕組みを検討することから具体的に明らかにした。

寝殿造住宅には少なくとも三重の空間的仕切りが存在し、これらによって質的に異なる空間が形成されていた。これらの空間的仕切りは塀（屋敷の外一内）、格子など（簀子と庇の間）、障子など（庇と母屋の間）であり、塀には門が穿たれていた。それぞれ内側には施錠のための装置が設けられていた。『源氏物語』は貴族階級の男女の出会いの物語であるので、女性の空間へ男性が入り込むことがしばしば描かれている。男女が対面する際、男性の位置は女性によって定められ、男女の間に様々な仕切りを女性が設定することによって男性の扱いが決められた。

寝殿造住宅に住む女性に対し、男性が次第に近づき対面を許されるという過程で、或いは男性が女性の手解を得ないで近づいてゆく過程で、これら仕切りの存在が顕在化する。そのことによって寝殿造住宅の空間的秩序が浮き彫りされる。即ち母屋・庇・簀子それぞれの間に仕切りがあることを利用して、何処の仕切りを閉じたかによって女性の男性に対する扱いの差が明らかになり、『源氏物語』での寝殿造住宅空間の段階的構成が明らかとなった。

## 第3章 感覚空間としての寝殿造住宅

従来、寝殿造住宅に関する研究において殆ど注目されなかった光、闇、音など、人間の感覚に注目した時、寝殿造住宅の空間はどの様に捉えられるのかを明らかにした。

寝殿造住宅の内部空間への光はすべて横からの光である。光は庭→簀子→庇→母屋へと、建築的な仕切りや室礼による仕りを透過し、通過し、次第に弱まっていく。登場人物、あるいは作者はこれらの光の性質の違いにより空間の差異を認識していた。

外部空間から女性のいる内部空間に進もうとする男性にとって寝殿造住宅は光から闇への空間として把握される。寝殿造住宅の空間的秩序はこの点からも理解できる。

第1章で検討した「奥」と「端」は『源氏物語』の中では「奥」は闇に、「端」は明るさと関わって表現される場合がある。このように「奥」と「端」は光の強弱でも表現され、空間の方向性を示すことが出来る概念でもあったのである。

我国の寺院建築も寝殿造住宅と同様に母屋・庇で構成される。母屋に安置される本尊には庇を通過した横からの光が到達し、礼拝者の視線はここに向かう。このように我国古代の建築空間は横からの光に対し工夫がなされていた。

『源氏物語』では寝殿造住宅の内部空間から外部空間がどの様に見えるかは、主体が母屋・庇・簀子、それぞれのどの位置にいるかによって異なることが表現されている。また、軒の出の長短の違いによって外部空間の見え方、さらにはその建物の格の相違をも認識していた。換言すればこれらによって寝殿造住宅の内部空間の構成及び建物の性質の違いを認識していたとも言える。

『源氏物語』では男性は女性のいる空間に入り込み、女性に近寄ることが表現されている。女性の空間は男性の視線が通らないように室礼が工夫されており、男性にとって視覚に頼ることが出来ない場合でも聴覚や嗅覚で認識することがありえた。特に夜間では視覚に頼ることが出来ず、聴覚や嗅覚を研ぎ澄ますことになる。男性と女性が出会うのが夜である場合、聴覚や嗅覚による空間把握が試みられる。女性は慣れた自分の空間で、闇や仕切り、室礼を利用することで巧みに男性を避けてゆき、このことによって男性は相対的に自分の位置を認識した。これらを通して寝殿造住宅の空間的な成り立ちを認識することが出来る。

## 第4章 日本建築が生成する空間領域

従来、静的に捉えられてきた日本建築の空間に関し、実在する古代建築に動的にアプローチし、これを断面的に検討することにより得られた新しい概念を提案した。これをもとに従来とは異なった空間の解釈が可能となることを指摘した。

日本建築は傾斜する屋根と共に、軒裏を持つ。建物にアプローチする際、ある地点でそれまで見えていた屋根面が見えなくなり、代ってそれまで見えなかった軒裏が見えてくる。この地点は空間認識の転換点であり、この地点から建物までの間を軒内包領域と名付けた。この内外に於いて建物にアプローチする主体は異なった空間を意識し体験する。従来の内部空間・外部空間の範疇とは異なり、この地点の内外に於いて異

なった空間領域が生成していることを指摘した。

『源氏物語』では軒先や軒下空間の簀子が外部空間と内部空間との関わりでしばしば表現されている。このことはこれら軒内包領域が外部と内部の中間領域として寝殿造住宅において重要な役割を担っていたと考えられることを指摘した。

## 第5章 寝殿造住宅の中心領域

寝殿造住宅の中心性について検討した。通常、寝殿造住宅の空間的中心は母屋、庇、簀子という建築的な構成から見て母屋が中心であったと捉えられるが、『源氏物語』においては、そこに住む女性が簀子一庇間、庇一母屋間の何処に仕切りを設定するかによって、中心領域が変化することとなる。即ち、簀子一庇間に仕切り（格子）を設定すれば中心領域は母屋のみから母屋＋庇へと拡大する。つまり仕切りを設定することでそれまでの空間的秩序に変化が起こるのである。換言すれば寝殿造住宅には曖昧な中心領域が成立していたことになる。

寺院建築では本尊が母屋に置かれるため、建物の中心部と礼拝者（観察者）の向かう方向の中心が一致しているが、『源氏物語』の寝殿造住宅においても仏事の際は建物の中心部と行事や礼拝の中心とが重なっている。つまり、寝殿造住宅においては日常と仏事では内部空間の秩序が変化するのである。

寝殿造住宅は、寝殿、対などの複数の建物から成っており、それぞれが女性の空間として使用され得る。これらにおいては上に述べた秩序がそれぞれ成立し得る。従って、この場合には中心領域が同一の敷地の中で複数存在することにもなる。

女性の住む建物（寝殿、対）は庭に囲まれ独立しており、外からの視線が通りやすく、かつ外部（庭）方向には空間的仕切りのない渡廊によって繋がっていた。このため、女性が男性を避ける時は中心領域である母屋方向へと向かわざるを得ない。このことは中心領域がそれぞれ独立して成立していたことをも示している。

## 結び

各章で得られた結論を要約した。

以上、『源氏物語』の寝殿造住宅について様々な角度から検討してきた。『源氏物語』の寝殿造住宅では、その主要建物の中心部分が女性の主たる生活空間であった。近世の書院造住宅では私的な空間は接客空間とは別に設けられ、更にこれは次第に切り離され、女性の空間も最終的には江戸城「大奥」に見られるように独立してゆく。住宅の空間的秩序は次第に再編成されていったのである。

# 論文審査結果の要旨

従来、古代・平安時代の寝殿造住宅の空間的性質に関する研究は、貴族達が遺した記録をもとに行われてきたが、著者は日常生活からの検討が不可欠と考え、当時の代表的文学作品『源氏物語』を研究対象として取り上げた。重要な空間概念の「奥」と「端」の具体的内容や寝殿造住宅の空間構成、そしてこれをどの様に認識していたのかを、建築史的観点から解釈することにより明らかにした。また日本古代の建築の周囲に独特の空間領域が存在することを示し、これをもとに寝殿造住宅の空間を解釈することが出来ることを示した。本論文はこれらの研究成果を纏めたもので全文、序章と5章によりなる。

序章は、本研究の背景及び目的を述べている。

第1章では、「奥」と「端」について、それぞれを文脈のなかで解釈することにより、「奥」は空間の方向性を示す概念であり、「端」は場所を限定して示す領域概念であることを明らかにした。これらは従来、対の概念として捉えられていたが、これとは異なる結論であり、重要な見解と言える。

第2章では、従来は概念的理解に留まっていた寝殿造住宅の空間的秩序について、平面上での空間的仕切の仕組みを検討することにより、三重の空間的仕切が存在し、またこれによって質的に異なる領域が形成されていたことを具体的に明らかにした。

第3章では、光・闇や音などに対する感覚を通して、寝殿造住宅の空間構成が認識され得ることを明らかにした。従来この様な観点からの研究は見られず、斬新な成果である。

第4章では、従来静的に捉えられてきた日本建築の空間について、実在する古代建築に動的にアプローチし、これを断面的に検討することにより得られた「軒内包領域」という新しい概念を提案した。またこれをもとに寝殿造住宅を解釈すると、この領域は築地塀の内に完全に収まることを明らかにした。

第5章では、寝殿造住宅の中心領域は空間的仕切をどこに設定するかによって変動し、曖昧であることを明らかにした。寺院建築では母屋に本尊が置かれるため中心領域が固定するが、住宅ではこれと異なることを指摘した。

以上要するに本論文は、『源氏物語』を研究資料として、寝殿造住宅の空間的性質を日常生活の観点から検討し、重要な空間概念の具体的内容や寝殿造住宅の空間的秩序を明らかにしたものであり、建築学の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認める。